矮屋に住り、潔癖にて唯物をむさ〳〵しくおぼえけらし、常に門戸を閉て來る人ごとに名乘せざれば開かず、あさくらや木の丸どの丶心地す、人に物をあたふるは門人のためといへども、かならず眼よりうへにさし上、是も潔きがためとぞ、

〔百家琦行傳五〕峻山和尚

峻山は阿州三好郡、農夫來代禎左衞門といへる者の子なり、幼稚ときより出家して、○中略德島勢見に住す、寺號今忘たり后隱居して同國南方日和佐藥王寺に閑居す、博識にして詩をよくし、最能筆なり、別號閑々子、また換水和尚とも云り、常に手水鉢、泉水などの水を換ることを好み、遊人來る毎に手つだはせて水をかふる事なり、今換し水を外人來れば亦換さする、敢て潔癖といふにはあらず、唯汲おきの水をきらふと見たり、されば一紙書を需る者は、一瓶の水を汲べしと書て、門にはり置けり、○下略

〔百家琦行傳三〕蛇隱居

天明寛政の頃、東武青山或御組屋敷のほとりに、武家の隱居ありけり、氏を武谷、俗稱を又三郎と云けり、這人希有の癖あり、常に虫を飡する事を好み、朝夕前栽のうちを掃除し、蛄蟬（けむし）、芋むし、はさみ虫、蜘蛛、蝶、蜥蜴（とかげ）、ひきがへる、都て何によらず虫とだに看ときは、忽ち捉てこれを飡ふ、小き虫は羽と足と髭をぬきてその儘喰す、蜘なども其ごとく、蛄蟬は毛を燒てくひ、蟾除は腹を割てはらわたを棄、皮をはぎて醬油をつけ燒て飡す、さればにや此家には虫といふもの一向になく、客次には蠅一隻とぶ事なし、皆這老人がくひ盡しけるなり、我家の前栽はさらなり、兩隣のせんざいまで虫一隻も生せず、万望は蚊と蚤をもとり給らんやなど、戯れいふ人も有けり、虫多き中にも、第一の好味として愉び飡するものは蛇なり、皮をはぎ、骨を去り、二三寸程づゝに斬て竹串にさし、炙物にして飡す、予其ころ此老人に蛇のかばやきを貰ひて飡たり、はなはだ美味ものなりし、